

インタビューにおける無意識の意識化と自己変容のプロセスに関する研究

1140425 菅 晃規

高知工科大学マネジメント学部

1. 本研究の背景と目的

1-1 背景 1

心理学の無意識研究の躍進によって、当事者の自覚や意図を伴わない、無意識の心の仕組みが急激に明らかになってきており、人間の主観的経験、判断、選択や好み、さらには対人行動までもが無意識的に導かれていることが分かっている。また、意識の重要な機能である積極的な未来の計画や過去の想起は、このような無意識の現在の焦点型の性質に支えられている。そして意識が未来や過去を巡回している間、無意識は現在の環境に留まって適切な行動を維持してくれている。

1-2 背景 2

現在、調査対象者の人生経験を聞き取り、それを分析・解釈することによって、問題解決に資する知見を生み出すことは、経営学を始めあらゆる分野で行われている。しかし、背景 1 で述べたことを念頭に置くと、本当に聞き取った内容が正しいかに関し、大きな疑いがある。

2. 目的

本研究の目的として 3 つの目的が存在する。

1. 人が、自分の過去の重大な意思決定の理由を、どこまで意識的に説明できるのか、全くできないことはあるのか、説明出来ない理由を確かめる。
2. もし説明できない部分があるのであれば、アクティブインタビュー的なインタビューの相互行為の中で、無意識的なことを意識化させるためには、どのようなプロセスが支援できるのか、そのプロセスを明らかにする。
3. そのプロセスが対象者に倫理的にどのような影響を与えるのかを明らかにする。

インタビューとは聞き手の引き出されるべき情報を客観的か

つ効率的に取りに行く方法である。

アクティブインタビューとは相互行為に対する物の考え方であり、聞かれるべきことを掘り起こすのではなく、相互行為の中に意味が生まれる方法である。

3. 研究方法

3-1 データ収集方法

島根県隠岐郡海士町に移住して来ている S 氏、A 氏の 2 名の方々にインタビュー調査を行った。

島根県隠岐郡海士町を対象地とした理由は、移住者の定住政策により、約 5 年半で新規定住者がいるという成功した場所のためである。S 氏、A 氏の 2 名の方を対象者として選んだ理由として、移住に対するプロセスについて聞き取り調査をしたところ、印象に残る無意識的な発言を確認することができたのは S 氏と A 氏の 2 名であった。また聞き取り調査を実施した一回目と二回目の期間を半年程開けることによって、一回目で我々が与えた影響について考えてもらう意図を含んでいる。

3-2 調査対象者の概要

第一次調査

A 氏、S 氏共に現在、隠岐國学習センタースタッフである。

S 氏： 6 月 23 日 S 氏の現職場である隠岐國学習センターにて約 60 分(1 回目)

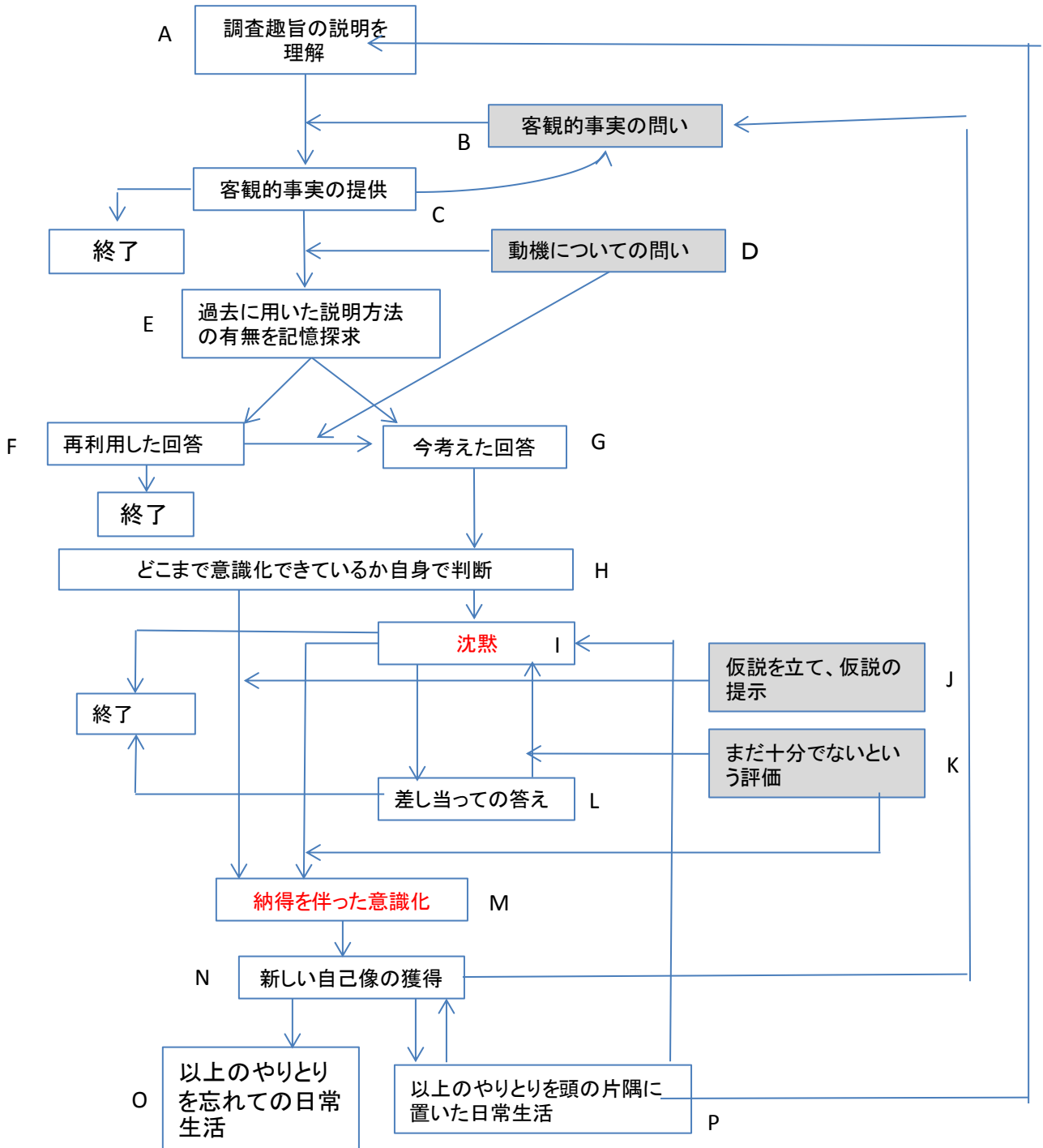
A 氏： 6 月 23 日マリポートホテル海士にて約 30 分(1 回目)

第二次調査

A 氏、S 氏に調査を行った。

S 氏： 11 月 27 日 S 氏の現職場である隠岐國学習センターにて約 120 分(2 回目)

A 氏： 12 月 19 日大学にて海士町にいる A 氏とスカイプにて約 90 分(2 回目)



3-3 分析方法

データの分析方法は以下の通りである。

第一に、二回に渡るインタビュー結果における調査者と対象者のすべての発言に対して、それぞれの発言行為が有する意味を解釈・特定していく。

第二に、どのような意味を有する発言行為に続いて、どのような意味を有する発言行為が発生する傾向があるかあるかについてのパターンを見出し、その全体を図示化しモデルを構築する。

以下の図は、書き起こし結果の音声の書き起こし記録におひとつひとつの発言行為に、どのように意味解釈結果を行っていたかを示す一例である。

書き起こし結果

発言行為の意味解釈結果

I: まずはですね、佐野さん自身の定住に至るまでの経緯や思いをお聞かせしていきたいんですが、けれども、まずこちらにいらしたのは平成で書うといひですか？

調査趣旨の説明
客観的なテークから質問開始

Q: 働が来たのは24年の春ですって平成24年の2月ですね。

質問に答える

I: そもそもこの海士町を来たのはいつ頃になりますかね？

客観的事実の確認(時期)

Q: 平成25年の11月ですかね。

それなりの高い確度から客観的事実を答える

I: では、ぜひ早く来られたんですね、最初には海士町を来たのはどういうルートですか？

質問に対する答え
客観的事実の確認(ルート)

Q: フェイスブックっていうのがありまして、藤岡と隣の間に共通の友人がいたんですけどこの人がシェアのボタンを押したので隣のどこにも記事がわかってきました。

客観的事実を答える

I: ちなみに間に入った友人はどのくらいお知り合いの身なんでしょうか？

追加情報を求める

Q: 筑前国府の時にお世話になった7つくらい上の先輩ですね。社外人になってからも仲良くさせてもらっています。

客観的事実を答える

I: その身と藤岡さんとはどういう繋がりがあるんでしょうか？

追加情報を求める

4. データ収集結果

S氏に対して二回のインタビュー調査を実施した。これを話題の転換点で区切ったところ全部で39個のステップに分けることができた。インタビュー全体の流れをこの分割方法に沿って以下のように提示する。

ステップ 1

調査趣旨の説明

ステップ 2

手始めに海士町に来た時期と知った時期、ルートを聞く。知人の知人のフェイスブックで求人を見たことをS氏が伝える。

ステップ 3

FBで友人になってから現地を見に行き、決定するまでの経緯と時期の特定

ステップ 4

移住前の仕事について

Z会で教材編集、教室の運営をしていたと答える。

ステップ 5

なぜZ会にいながら海士町のような田舎に来ようと思ったのか、情報を見て引かなかった点をS氏に問いかける。

ステップ 6

単純に面白そうだったこと、そういう世界があるのかを考えたことがなかったことが理由だと言う。

ステップ 7

そういう世界とは何であるかを問いかけ、それが離島で高校生が勉強しているその様子のことだと答える。

ステップ 8

生まれと育ちについて問いかけ、田舎で暮らしたことがないと明かす。

ステップ 9

Z会でのポジションを聞き、生徒との接点が薄かったことを話す。

ステップ 10

そういったことの物足りなさを感じ、実際に教えたいという気持ちどこかにあったと答え、隠岐に来た時は興味半分だったと答える。

ステップ 11

収入が下がるにも関わらず、実際にフェイスブックで連絡をとった理由を探る。

ステップ 12

海士町に興味を持った際の無意識を意識化させるために質問を繰り返し投げかける

ステップ 13

S 氏の当時の心情に関する非常に鮮明な記憶を開示する

ステップ 14

鮮明に開示された記憶を基に当時の心情変化をどこまで説明できるかを探る

ステップ 15

海士町の子供の姿を見て、その子たちを応援したくなった気持ちに移住の理由としては大きいことを語る

ステップ 16

過去に田舎に関わった経験を聞き、その経験がないどころか田舎で暮らす気がなかったことを知る

ステップ 17

ステップを踏まえた上で、FB での情報に反応されたことを非常に不思議に思い、興味深く思う

ステップ 18

マイナス要素ばかりしかない移住を決意した自分に対する推定をする。

ステップ 19

Z 会に対して不満があったのかを問い、非常に満足度は高かったと答える。不満はなかったと答えた後、気づいたように生徒に力を入れて頑張ってもらいたいという願いを持っていた。

ステップ 20

恵まれていない教育環境にいる子供たちを見ていたいと思い、見ていたら携わりたいと思うようになったと答える

ステップ 21

Z 会当時の生徒との距離があり、くすぶっていた思いがあった

ステップ 22

移住の相談をした人の話を聞き、親には相談したが、相談する前から移住を決めていたことを明かす。

ステップ 23

両親の納得がまだはっきりと得られていないことを明かしつつ、誰かに相談した方が良いということをお話す

ステップ 24

第一回聞き取り調査終了から第二回聞き取り調査に至るまでのメールのやり取りである。それをいかに示す。

「S 様には、我々が経緯をお尋ねする中で、過去のご自身の決定の未知なる部分をその場で解き明かして下さるような語りをして下さったことが深く印象に残っておりました。そこで、前回お聞きできなかった幾つかの点をお聞かせ頂くことはできないかと思っております。」

これに対する S 氏の返信は以下の通りである。

「ご依頼の件ですが、喜んでお引き受けいたします。」

ステップ 25

調査趣旨の説明

ステップ 26

前回の聞き取り調査によって受けた気付きについて質問し、答えてもらう。

ステップ 27

他の無意識の意識化の場があったのかの確認 初めてであったことを否定する答え、ただし第一回のインタビューは無意識を言語化しないといけないと感じる。

ステップ 28

過去の無意識の意識化体験を聞き出す。

ステップ 29

仮説を立て、仮説検証プロセスの評価の

ステップ 30

調査趣旨に再び説明し、前回のインタビューの影響について確認

ステップ 31

漠然と思っていた居心地の悪さの言語化

ステップ 32

前回以降の新たな考えを思い出そうとするが明確な答えが思い浮かばない

ステップ 33

ライフヒストリー(出身地、大学での専攻、就職活動)について確認し、その答え

ステップ 34

教育を一生してもいいと思ったきっかけの気づき

ステップ 35

就職活動中に性格の変化が起こる

ステップ 36

話題の転換により自分が思っていたリスクに対する新たな気づき

ステップ 37

話題の転換により性格が努力至上主義になった経緯を答える

ステップ 38

努力至上主義と島前高校を応援したいということの繋がりに気づく

ステップ 39

就職活動で自分より優秀な人を出したいという思いが明確になった

4. 分析結果

3.3 で示した分析手法を用いて構築したモデルを図 1 に示す。この中には、A~Q の 17 種類の発言行為が記されており、それらが矢印で結ばれている。矢印は、ある種類の発言行為の後に別の種類の発言行為が生じる可能性が高い事を示している。また、網掛けのアルファベットは、それが調査者の発言行為であることを示している。以下 A~Q のそれぞれについてそれがどういう種類の発言行為であるかを箇条書きする。

上記の図の A~Q は無意識を意識化させるための重要な項目である。

・A 調査趣旨の説明

手始めに聞き手からなぜ聞き取り調査をするのかについての説明を受けそれ理解する。

・B 客観的事実の問い

聞き手が話し手に過去の自分を第三者的に振り返ってもらうための質問をする

・C 客観的事実の提供

話し手が聞き手からの客観的事実の問いに対し、過去の自分を第三者的に振り返り答える

・D 動機についての問い

話し手の当時の意思決定、行動に対し質問する

・E 過去に用いた説明方法の有無を記憶探求

過去に同じような答え方をしたのか、新しい答え方をしているのか話し手が過去の自分を振り返る

・F 再利用した回答

質問に対し過去と同じように回答する

・G 今考えた回答

質問に対し、新たな思いつきを回答する

・H どこまで意識化できているか自身で判断

今考えた回答が、どの程度の確かさを持っている答えなのかを自身の判断基準により判断する

・I 沈黙

過去を振り返り答えを導きだそうとする、または何も答えが出ない

・J 仮説を立て、提示

沈黙に対し聞き手が仮説を立てることで気づきを生む可能性がある

・K まだ十分でないという評価

差し当たっての質問で、聞き手が満足しない場合、何度も同じことに対して質問をすることで、十分な評価のできる気付きを得る

・L 差し当たっての答え

・M 納得を伴った意識化

ある無意識に対して、聞き手が納得し、ある程度確からしいとされる程度にまで意識化を行う。

沈黙に対し、質問の内容を対応させる

・N 新しい自己像の獲得

聞き取り調査により無意識の意識化が起こり、新たな考え方が生まれる

・O 以上のやりとりを忘れての生活

聞き取り調査によって気付きが起らず、日常生活に影響がない

・P 以上のやりとりを頭の片隅に置いた日常生活

聞き取り調査によって気付きが起こり、日常生活の中で考えている

・Q 終了

これ以上議論しても納得のいく答えが見つからないであろうと判断された場合に、現在の話題を終わらせて次の話題に転換させる。もしくは調査を終了させる。

以上のプロセスの中で最も重要なのは、I(沈黙)とL(差し当たっての答え)との間を何度も繰り返すループから、突如として聞き手が脱出し、M(納得を伴った意識化)へと進む箇所であり、この瞬間がインタビュー調査全体の中で最も劇的な瞬間である。この瞬間を経たインタビュー対象者はN(新しい自己像の獲得)へと進むことになる。インタビューにおけるこの箇所の実際のやりとりは、以下のようなものであった。なおI:は聞き手の発言を、また、S:は調査対象者の発言を意味している。

I: 京都で育たられて横浜に来たその人生の中で田舎と関わったという経験はお持ちだったんですか？

S: 田舎にそんなに親しみがあつたわけではないですが、祖母の家が田んぼとか畑があるような場所ですね。

I: どこですか？

S: 京都の中部の方ですね。京都はもう中部の方しか田舎がないですが、そこで農作業を手伝ったっていうのは小学生の頃ありましたけども。中高大はそういうことは無かったですね。

I: その時に都会の日常から離れるわけですけども、どんな感覚だったんですかね？

S: そこはネックだったんですけどね。やっぱり都会暮らしが好きだったので。

I: ファミコンとかのほうか？その世代ですよ？

S: そうですね。まあ関東の方にも友達がたくさんいましたし。

I: 高校時代から？

S: いや社会人になってから。

I: やっぱり小学生のころから、田舎は何かちょっとちがうなって言う感覚でしたか？

S: 田舎に住むことは無いなと思ってましたね。小学校から虫とか苦手でしたし。1年も住んでたらなれるもんかとは思いますが。笑

I: じゃあなおさらフェイスブックで情報を見て、何かに反応されたというのが、非常に不思議でもあり、興味深いんですけど。

S: 確かに、環境とか生活面においてはマイナス面でしたね。寒いか、12月とかすごい寒かったですからね。この夏の時期は良いんですけど。それを振り切るぐらいの大きなことはあつたということですね。

I: 実際に見て魅力を感じてマイナス要素を振り切られたというのであれば想像しやすいんですけど、そのフェイスブックを見られて、ほとんど知らない方にアクセスするというのは心理的な負担もあったんじゃないかと思うんですね。それに打ち勝つものは何だったんですかね?その虫も嫌いだったような男の子であった幼少期もありながらっていうので。なんだったんでしょうね?

S: うーん、沈黙(10秒)連絡を普通取らないですもんね。

I: 普通取らないですね。

S: そうですね。いったい何がピンと来たのかな。

I: 僕が1つ思ったのは、Z会で現場には携わってなかったっていう、漠然とした不満っていうかそういうものが直結したのかなと思ったんですが、きっとそれだけでもないですよ?

S: そうですね。まあでもZ会の仕事については非常に満足度は高かったですけど。そこは不満だったかというところでもないですね。ああ、でも通っている生徒にはもっと力いれて頑張ってもらいたいとかはあったかもしれないですね。結構授業料のする塾なので。親さんとしてはその低くない負担をかけて通わせてくださってるんですけど。やっぱりその力が入っていない子とかもいますので。それとこっちの状況を比べるとね、なんぼ良い資料もらっても勉強しない子もいれば、全然状況の悪いところでも頑張っている子もいれば。(小声)

以上の書き起こし結果の抜粋において最後のS氏の発言における、「そこは不満だったかというところでもないですね。ああ、でも通っている生徒にはもっと力いれて頑張ってもらいたいとかはあったかもしれないですね。」の箇所において、M(納得を伴った意識化)が生じているのである。「ああ、」が、S氏の内部で発見が起こったことを端的に示している。すなわち、フェイスブックで見かけた求人情報を後日再度見に行

った何気ない行為と、都会で仕事をしていた際に生徒に対して漠然と感じていた不満足感は、S氏の頭の中で無意識的には繋がっていたかもしれないが、それが初めて意識的に繋がったのがこの瞬間だったのである。

5. 結論

本研究では以下の3つの疑問点に答えを出すことを目的としていた。

1. 人が、自分の過去の重大な意思決定の理由を、どこまで意識的に説明できるのか、全くできないことはあるのか、説明出来ない理由を確かめる。
2. もし説明できない部分があるのであれば、アクティブインタビュー的なインタビューの相互行為の中で、無意識的なことを意識化させるためには、どのようなプロセスが支援できるのか、そのプロセスを明らかにする。
3. そのプロセスが対象者に倫理的にどのような影響を与えるのかを明らかにする。

本研究はこれらの疑問点について以下のような答えを出すことができた。

まず一点目の疑問に関しては、人は自分自身の人生を極めて大きく左右するような意思決定に関してできえ、その動機を他者に説明できず、また、説明できない自分に戸惑い、また、不思議に思うというケースが存在するということが示された。

第二の疑問に関しては、調査対象者が無意識を意識化していくプロセスがどのように支援されるかを示すモデルを構築することができた。

なお、このモデルから明らかになったのは、インタビューに協力する対象者は3つのモードを場面場面で使い分けているということである。第一のモードは過去の自分に感情移入するモードである。例えば、以下の箇所はこのモードに対応する。

I: 当時横浜にいてそういう決断をするに当たって、ご相談された方というのは、身内の方でいらっしゃいますかね。

S: 身内にはですね、決めてから言ってしまったので怒られましたけど(笑)

I: 親御さんですか。どんな反応でしたか。

S: はい。いやあ、父は怒っていましたね。母は泣いていましたね。これは説得するのは大変だなと思いましたね。(笑)

この末尾の「大変だなと思いましたね」はこのモードの典型例である。次に第二のモードは過去の自分を相対化し客観的に見ているモードである。例えば以下のモードは典型的である。

I: 意思決定したのはいつですか？年内ですか？

S: うーん、訪問時だと思いますね。

第三のモードは、過去の自分を客観的に見るという第二のモードの自分を客観的に見るというモードである。

例えば以下の箇所は典型的なモードである。

S: 前回お話した時も自分であんまり考えていなかった部分だったり、自分でどうしているのかとか話していると出てきて、それは自分でも不思議だったなと思います。

最後に第三の疑問点に関しては第二の疑問点を基にして検討することが可能である。インタビュー調査の倫理的問題を考えるとき、インタビュー調査がいったい誰に影響を与えているかを考えることが重要である。まず、調査者が対象者を第二のモードに置くということは、その調査者は将来来るであろう別の調査者に影響を与えていることを意味する。もしも、調査者が不適切な方法で対象者に過去を振り返らせた場合、その振り返った結果は調査者の記憶に残り続けるだろう。この記憶は将来の調査者が自身の目的に沿って調査を行う際の妨げとなる可能性となる場合がある。次に対象者を第三のモードに置くということは、インタビュー終了後に対象者の行動パターンが変化することに繋がる。すなわち調査者は対象者を通じて、対象者と日常的に関わる人たち

に影響を及ぼしているのである。調査者はそのことを意識しなければならない

6. 今後の課題

本研究にはいくつかの課題がある。第一に本研究が構築したモデルは別の調査者や調査対象者が参加するインタビューにおいても成り立つものであるのかを検証する必要がある。

第二に、本研究の対象者は28歳の若者であった。したがってこれまで自分自身を振り返る機会が少なかった可能性がある。したがって本研究が発見した事柄が、より年長の対象者に対しても成り立つのかを明らかにすることは重要な課題である。